

7月6日はゼミと世話人会を開催します

当日はゼミ終了後に世話人会を開催します。会員の皆さんの参加も歓迎です。議題は下記の通りです。

記

- 1、2023年7月～24年6月収支報告案
- 2、今後の会の運営に付いて
- 3、その他 以上。

**「我々はどこから来て、今どこにいるのか」
上・下 文芸春秋社 2022年10月第1刷発行**

—7月6日ゼミ紹介文：亘 康男会員記—

私の発表は、歴史人口学者・エマニュエル・トッド氏の著作から、その一部を紹介するものである。

なお、原著はフランス語で2017年パリにて発行されたので、邦訳版出版時までの期間をカバーする意味で、「日本の読者へ・・・政治学、経済学ではわからない現代世界」との追加部分があり、参考になるので以下に取りまとめて紹介する：

<西洋の無力感とウクライナ戦争>

自らの状況を理解できないという無力感が西欧社会(広義の西欧に日本も含めて)を覆っている。その背景には、経済学が支配的イデオロギーとなり、全ては「経済」によって決まるという経済決定論が思考停止を招き、この「虚偽意識」が世界の現実を直視することを妨げている。人間の行動や社会の在り方を、心理学者フロイトが用いた「場所論」的に、「政治・経済」(意識)、より深い次元の「教育・宗教」(下意識)、さらにその下の「宗教・家族システム」(無意識)のレベルにまで深く下りてゆく人類学的アプローチが必要とされる所以である。

<二つの陣営の「相互作用」>

世界はいま二つの陣営の「相互作用」下にある。

*NATO対ロシアの戦争。米国対中国の台湾をめぐる軍事的緊張。

*経済的グローバリゼーションに依る「生産大国」(中国・ドイツ・ロシア)対「消費大国」(米)、即ち「貿易収支黒字国」対「貿易収支赤字国」(米・英・仏など)への分岐現象。

*GDPで測る「経済力」は最早リアルな経済の実態を反映していない。例えば、医療費:米国は18%で平均寿命は77.3歳。欧州は医療費9~11%で平均寿命はドイツ80.9歳、仏81.2歳、日本84.6歳。乳幼児死亡率は2010年時でロシア4.9人対米5.4人。

<{経済構造}と「家族構造」の一致>

人類学的にみると、貿易赤字国は伝統的に個人主義・核家族社会でより双系的であり、女性のステータスが比較的高い。これに対し、貿易黒字国は伝統的に権威主義的で、直系家族か共同体家族で、女性のステータスが比較的低い。➡「経済構造」と「家族構造」が驚くほど一致している。父系社会は、第二次産業に強く、モノづくりは男性原理と親和性がある。これに反し、女子のステータスが比較的高い双系社会は、第三次産業と親和性を持っている。即ち、「消費」と「生産」へとそれぞれ特化する形で二つの陣営に分かれ、しかも、グローバリゼーションの中で相互依存関係にあるというのが、現在の世界の構造である。

<奇妙な戦争>

対立する二つの陣営が、経済的には極度に相互依存している事実。互いに相手を完全には破壊せずに戦争を続ける必要性がある戦争。私見では、戦争の真の原因は、紛争当事者の意識(イデオロギー)よりも深い無意識の次元に存在する。即ち、家族構造(無意識)から見れば、「双系制核家族社会」と「父系制共同体家族社会」の対立(=米露間の戦争)である。冷戦期も含めた長いスパンで見れば、共に凋落に向かう二つの勢力の間で起こった戦争である。(中国は中長期的に見て、出生率の低さからいって、世界に脅威とはならない。)他の先進国も擡頭の局面よりも衰退の局面にある。日本が対

外膨張的な政策を展開することはありえない。今次の戦争の当事国はどこも「弱小国」で、どこかに弱みを抱えている国同士がやり合っている点で、第一次・第二次世界大戦との大きな違いがある。

＜人口動態から見た戦争＞

1850~1950年の各国の人口はものすごい勢いで増加した。特に従来の列強(英仏)に対して、ドイツ、日本、ロシア(ここでは「ヨーロッパ・ロシア」、即ちウラル山脈以西から現在のウクライナ、ベラルーシ、バルト三国までを含む)という新興勢力が急速に擡頭。この三国は生産力も急速に増強し、各国の力関係が絶え間なく不均衡となり、相互に警戒心を強めた。仏はドイツの擡頭を、ドイツはロシアの擡頭を、英は日独露の全ての擡頭を恐れた。第一次・第二次大戦の背景には、新興勢力の急速な擡頭に依るパワー・バランスの不安定化が存在した。この不均衡に決着をつけたのは、人口・生産力で他国を圧倒する形で増強した米国のリーダーシップで、これにより戦後の秩序は作られた。それでは今後30年の見通しは？(詳細はゼミで)

＜「経済制裁」という殲滅手段＞

一見、「戦争」を回避するための「平和的手段」に見えても、その究極的目的地は「相手国の破壊」にある可なり暴力的な手段である。長期化すればするほど、双方にダメージを与えるだろう。私見では、西側メディアの論調とは違って、そのダメージは、ロシア経済よりも、「消費」に特化した西側経済の脆さの方が今後露呈してこよう。西側とロシア(中国)との対立は、無意識次元の人類学的な対立だ。二つのシステムの間完璧なほどの「相互無理解」がある。ここにこそ、この戦争の最大のパラドクスがあり、それ故に、この戦争を終わらせるのは容易でなく、より激しいものになる可能性がある。以上。

ゼミ会場と時間 13:15~16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場には12時30分から入場できます。

藤堂高虎の生きざま

—戦国武将の渡り奉公と忠誠心—

清野 敬三 会員記

◇はじめに◇

藤堂高虎は、初め近江の浅井長政に仕え、その後主

君を転々と変え、羽柴秀長から秀吉を経て、最後は徳川家康の信任厚い側近にまでなった。一介の土豪の子から主君を7回も変え、32万石の大大名にまで上り詰め、破格の出世を遂げたことになる。

そのため「渡り奉公人」の代表格とされ、変わり身のうまい「処世家」とか、節操のない「ゴマスリ武者」などと、あまり芳しくない評判がある。

しかし当時の主従関係は、江戸時代と異なり自らの能力に応じて主君を選ぶのは当然のことであった。高虎は、時々主君に誠実に仕えた名将であり、藩作りの行政にも寄与した政治家であり、かつ優れた建築家でもあり、その多才の能力への高い評価もある。

戦国武者の倫理観など、当時の時代背景を参考に、高虎の行動を振り返ってみたい。

◇渡り奉公の時代◇

高虎は、弘治2年(1556)近江国犬上郡藤堂村の土豪藤堂虎高の次男として生まれた。父虎高は、琵琶湖北端の小谷城主浅井長政に属していた。高虎は幼少より体格に恵まれ、性格は粗暴で短気、腕力と胆力が自慢であった。

元亀元年(1570)高虎 15 歳の時、姉川の戦いが起きた。高虎は徳川軍と戦い、初陣で兜首を取る武功を挙げ浅井家中にその名が知れ渡った。その後、織田軍との小谷城攻防戦でも活躍し自慢の鼻が高くなり、周囲の妬みもあり、勲功をめぐる言い争いから同輩を斬り捨て、浅井家を飛び出すはめになった。

小谷城を出奔した高虎は、近くの山本山城主阿閉貞征の許に逃げ込んだ。貞征は以前浅井氏に臣従していたが、信長側に寝返った武将である。高虎を厚遇してくれたが、ここでも刃傷沙汰を起こし浪人となった。

次いで、猛将の聞こえ高い小川城主磯野員昌に客分として身を寄せた。員昌も元浅野家の家臣であったが、寝返りの疑いを掛けられ、信長側の陣営に奔り湖西の小川城を任されていた。

その後、信長の命で小川城には織田信澄が養子に入り、員昌は隠居させられ、高虎は客分の立場を失った。信澄から母衣衆に加えられたが、禄 80 石はあまりにも少ないと腹を立て、またも主家を飛び出した。

◇羽柴秀長に仕える◇

天正4年(1576)、秀吉の弟羽柴秀長に仕えることになった。知行は破格の300石とされ、ようやく献身できる主君に巡り会うことができた。この頃、信長の安土築城が始まり、高虎もその応援に駆り出され、建仁寺番匠で寺大工棟梁の甲良光弘や、石垣積み権威穴太衆の親方佐治兵衛と親しくなり、当時の日本の最先端の築城術に接し基礎を学び、のちに築城の名人と称される土台となった。

織田軍の毛利攻略が始まると、秀吉が中国攻め総大将に任命され、秀長もそれに従った。傘下の高虎も各地を転戦し勇猛さを発揮する。但馬の竹田城攻略では偵察と奇襲で抜群の働きをみせ、1千石加増され侍大将に出世した。次いで別所長治の守る三木城包囲作戦にも参加し、勇将賀古六郎右衛門を討ち取るなどの戦功により2千石加増され、3千3百石の鉄砲大将となった。

天正10年(1582)本能寺の変が起き、秀吉は中国大返しを敢行して山崎において明智軍と対峙した。藤堂隊は、天王山に陣する秀長隊の先鋒として戦果を挙げた。翌年の賤ヶ岳の戦いでは、佐久間盛政軍を銃撃し敗走させて、戦勝の端緒を開く戦功を挙げ、1千3百石の加増をみた。

◇大名に出世◇

小牧長久手の戦いの後、天正13年(1585)主君秀長は、紀州平定と四国攻略の軍功により紀伊・和泉・大和の領主になり、大和郡山城を本拠とする大和豊臣家を興した。高虎は、和歌山城の普請奉行を命ぜられ、これが最初の築城となる。四国攻めの功も加わり、紀州粉河に領地を与えられ合計1万石の大名並みになった。武士の出世は戦場の功だけではないと悟る。

天正15年(1587)の九州征伐では、根白坂の戦いで秀長軍の前衛宮部継潤隊が不意を衝かれ総崩れ寸前になったのを救援し、さらに夜襲をかけ島津軍を和議に追い込んだ。その功により1万石の加増があり、紀州粉河城主2万石の大名になり、正五位下・佐渡守に叙任された。

天正19年(1591)高虎の恩人である秀長が死亡した。秀長の甥で養子の秀保が後を継いだ、自殺したため大和豊臣家百万石は廃絶となった。高虎は、秀吉から直臣になれとの要請を断り、出家して高野山に上った。しかし、秀吉の再三の説得により還俗し、5万石の加増を受け伊予板島(宇和島)7万石の大名になり秀吉に

仕えることになった。

秀吉による朝鮮出兵では、伊予水軍を率いて参加し、閑山島沖の海戦で敵将元均の水軍を殲滅する武功を挙げ、南原城攻防にも参加し、大洲城1万石を加増され計8万石となった。

◇関ヶ原の戦い◇

慶長3年(1598)秀吉が亡くなると、豊臣家臣団は加藤清正・福島正則らの武闘派と、石田三成らの政務派に分裂した。高虎は、かねて親交があった徳川家康に急接近していった。家康も、高虎を朝鮮撤退の指揮責任者に推薦するなど、味方に引き込もうとした。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いは、家康と三成の謀略戦から始まった。家康傘下の部隊は、武闘派の秀吉恩顧の者たちが大部分であり、いつ敵方につくか分からない。家康は、高虎に諸将の動向を注視し報告するよう密命を与え、この頃から高虎は家康の腹心的存在になっていく。

戦いは小早川秀秋の寝返りを契機に東軍が優勢になったとされるが、その前面にいた大谷吉継傘下の脇坂・朽木・小川・赤座の諸隊が、突然反転し大谷隊を襲ったのが決定打となった。高虎が近江時代の人脈を生かし内応工作を行ったものである。戦後、高虎は今治城12万石が加増され、宇和島8万石から一足飛びに計20万石の大名になった。

◇家康の側近に◇

高虎は徳川家の重臣となり、江戸城改築の功績などにより慶長13年(1608)伊賀・伊勢20万石に移封され、伊予越智の2万石を加え、22万石の津藩主となった。これは大坂方への備えとして、主要ルートの中山道の彦根に譜代の井伊家を配したのに併せ、東海道の伊賀・伊勢の押さえに高虎を起用したもので、豊臣方大名への監視と牽制である。

また、家康の指示により伊賀忍者を組織化し、重要な情報の供給源とした。その情報を密かに家康に伝え、家康はそれを多とし「大事あらば藤堂を先手とし、井伊を二番手とせよ。」と命じるまでになった。さらに、高虎は諸大名に先駆けて妻子を人質として江戸に送って家康に忠誠を示した。これが後の参勤交代の端緒となっている。

慶長19年(1614)、大坂冬の陣では高虎の進言で導入した大砲が講和を早めるきっかけとなった。翌年の夏の陣では、高虎隊は八尾において長宗我部盛親隊の猛攻にあい多くの死傷者を出し苦戦を強いられたが、

その功績により5万石を加増され合計27万石となった。

大坂落城の1年後の元和2年(1616)、家康が死亡した。高虎は、秀忠・天海・崇伝・本多正純に並び病床の枕元に侍ることを許されるまでの側近になっていた。

◇高虎の晩年◇

家康の死後も、高虎は秀忠・家光に対しても懸命に努め信頼を勝ち得た。元和3年(1617)日光東照宮の造営の功績により、5万石の加増を受け32万石の大大名となった。家康が生前から望んでいた秀忠の娘和子の皇室入内にも奔走した。

一方、秀忠・家光は大名の取り潰しを頻繁に行い、外様のみならず親族・譜代にまで及んだ時代である。家康の第一の側近として権勢を恣にした本多正純でさえも、所謂「宇都宮吊り天井事件」で失脚した。その際、高虎は秀忠に「日光往復の道中に気を付けるよう」事前に忠告して点数稼ぎをしている。謀略に一枚噛んでいたのかもしれない。

寛永7年(1630)、高虎は江戸の藩邸で死去したが、藤堂家の津藩は、改易を免れ削封もなく幕末まで生き残った。

◇築城の名手◇

高虎は、加藤清正・黒田長政とともに「築城の三名手」と称され、縄張り(設計)にかけては当代随一と言われた。天守閣の設計では、従来の望楼型天守に対し、層塔式天守を創始している。望楼型は構造上不安定で屋根裏の部屋を持ち使い勝手が悪い。層塔式は規格化された部材を用いて全体を組み上げ、構造上の欠陥を解消しており、コストの上でも革命的とされる。

高虎が手掛けた城としては、和歌山城を手始めに膳所・伏見・篠山・亀山城があり、江戸城の慶長天下普請でも設計を担当した。自分の城としては、今治・伊賀上野・安濃津(津)城がある。

◇渡り奉公と寝返り◇

高虎は、もともと近江国の土豪である。戦国期の土豪には、江戸時代の「忠臣二君に見えず」という倫理感はない。戦争が起こるたびに、どの主君の下で陣場借りをすれば自分にとって有利かを選択する自由を持っていた。「渡り奉公」は当たり前の行為であり、非難されるいわれはない。「節操がない」「風見鶏」「寝返り大名」などの批判は当たらないだろう。

しかし、相手を偽っての突然の「裏切り」は、背信行為である。これは当時でも現在でも変わらない。関ヶ原の戦いで、小早川秀秋が世の批判を浴びるのはそれであろう。高虎は、その時々の主君に誠心誠意仕え、裏切ることにはなかった。ただし、武略軍略として裏面工作を行い、相手に内応させることには長けていた。

時代はくだるが、幕末の鳥羽伏見の戦いで、藤堂藩は井伊藩と並び徳川家の先陣を務める重鎮でありながら、俄かに薩長軍に寝返り、敗走する徳川兵をさんざん砲撃し、幕府瓦解の端緒を作った。司馬遼太郎をして「藩風は藩祖の性格で決まる」と語らしめ(『霸王の家』)、世上「藤堂の犬侍」と指差されたのは藤堂家にとって痛い汚点だろう。「常に勝ち馬に乗る」家風は許されるとしても、突然の「裏切り」はいただけない。

◇ごますりと忠誠心◇

高虎は、秀吉の生前から家康と親交をもっていた。秀吉の死後は公然と家康に臣従を誓い、家康の私用まで弁じ、反徳川派の大名の動向を探り家康に報告した。家康も初めは警戒していたが、高虎の心からの献身ぶりに気を許すようになった。

「へつらい大名」「たいこ持ち」「ごますりの権化」などと陰口されるが、主君に対して滅私奉公することは、高虎にとって当然のことであり、何ら疚しいことはない。慎重居士で、容易に人を信用しないあの家康の信頼を、外様でありながら勝ち得たのは、高虎ならではの忠誠心である。

高虎が家康に仕えた最大の武器は諜報力であった。特に西国の豊臣恩顧の諸大名の動向に関する情報は家康にとって貴重であった。このことは、諸侯にとっては高虎が煙たい存在であり、いつ足を引っ張られるか分からない不気味な相手であることを意味する。高虎が家康の信頼を得れば得るほど、警戒心が募る結果となる。

高虎は、7回も主君を替えたが、その時々主君には誠意を尽くし忠実に仕えた。主君からも家臣からも信頼され、領民の評判も良かった。しかし、他藩の諸侯からは警戒され、嫉妬されたのは宿命かもしれない。了
8月は猛暑でお休みし次回ゼミは9月になります。

9月8日(日)ゼミ・テーマ

西アジアとは何か―山腰 直仁会員

○9月は会場の都合で第1土曜日ではなく、第1日曜日となります。

以上。